

本科 1 期 5 月度

解答

Z会東大進学教室

高 1 東大国語



【問題】（演習）

出典：無住『沙石集』（巻九　一）の一節／名城大学・改

現代語訳

A ある人の妻が、離縁されて（出ていくために）いよいよ馬に乗ったそのとき、雨が降ってきたので、その夫が「雨が止んでからお行きになるがよい」と言つたところ、妻の返事に、

降らば降れ……雨が降るなら降ればよい、降らないなら降らなくともよい。雨が降らなくても濡れないで行くことができようか、いやできない。（涙を拭うはずの）袖であるならば「（＝たとえ雨が止んでも、この袖はあなたと別れる私の悲しみの涙の雨で濡れてしまうはずだから、雨が降つても晴れても私には同じことです）」。

と答えたので、（夫は妻が）自分でもどうしようもなく愛しく思われて、（離縁を取り消し）引き留めたということである。

B 遠江国（＝現在の静岡県西部）にも、ある人の妻が、離縁されるということで、いよいよ馬に乗つて出たが、人の妻が離縁される時は、家財道具を、好きなだけ取つていく習慣なので、「何でもお持ちなされよ」と、夫が申した時、「あなた様ほどの大切な方を捨てていく我が身が、（あなたのほかに）何が欲しいはずがあろうか（いや、何も欲しいはずがない）」とにつこりと微笑んで、嫌味もなく言ったので、（夫は）妻の様子が心の底からいじらしく思られて、すぐに引き留めて、死ぬまで連れ添う仲となつたのだった。人に憎まれるのも、愛されるのも、前世の因縁だとはいうものの、（その人の）心の在り方次第であるに違いない。

問1 a == 湿れ（動詞）／で（助詞）／行く（動詞）／べき（助動詞）／袖（名詞）／なら（助動詞）／ば（助詞）／こそ（助詞）

c == 何物（名詞）／か（助詞）／欲しきる（形容詞）／べき（助動詞）

問2 a == (エ) b == (イ) d == (ア) e == (ウ)

問3 I == (エ) II == (ウ)

問4 前世の因縁だと思われる人からの愛憎も、本人の心の在り方次第でよくも悪くも変わりうるものだということ。

※補足

問1は詳しく答えると次のようになる。

a == 湿れ（ラ行下二段活用の動詞「湿る」の未然形）／で（打消の接続助詞）／行く（カ行四段活用の動詞「行く」の終止形）／べき（当然の助動詞「べし」の連体形）／袖（名詞）／なら（断定の助動詞「なり」の未然形）／ば（順接仮定の接続助詞）／こそ（強意の係助詞）

c == 何物（名詞）／か（疑問の係助詞）／欲しきる（シク活用の形容詞「欲し」の連体形）／べき（当然の助動詞「べし」の連体形）／

【問題】(自習)

出典：菅原孝標女『更級日記』／オリジナル問題

現代語訳

「東路の道の果てなる常陸……」などといわれるけれど、その常陸よりも、もつと奥深い土地で育った人（その私）は、どんなにか田舎じみていただろうに、どうして思い始めたものか、「世間には物語というものがあるそなだが、それをなんとかして読みたいものだ」と、しきりに思うようになり、（そんな折から）所在なく退屈な昼間とか、宵の団鑾などに、姉、継母などの大人たちが、あの物語だの、この物語だの、（さらには）光源氏の有り様などを、ところどころ話すのを聞いていると、（私の）物語を読みたい気持ち「〔物語へのあこがれ〕」はますます募るいっぽうだけれども、（大人たちだつて）私の心ゆくまで、（物語を始めから終わりまで事細かに）そらんじて、どうして話してくれたりしようか。（私はもう）あまりのものかしさに、薬師如来の等身像を造つてもらい、手を洗い清めたりして、誰も見ていない隙にこっそりと（その仏間に）籠もつては、「一刻も早く上京させ、（都には）たくさんあるとか申しますその物語を、あるだけお見せくださいませ」と、一心不乱にぬかずいてお祈り申し上げる（のだったが、そうこうする）うち、（私が）十三歳の時、（当時、上総の介だつた父の任期が無事に終わり、）いよいよ上京することとなり、九月三日に（ひとまず）門出して、「いまたち」という所に移つた。

解答

問1 ① あづま路〔1行目〕・光源氏〔3行目〕・薬師仏〔5行目〕・京〔5行目〕・いまたち〔7行目〕

② そ（の物語）・か（の物語）〔3行目〕・わ（が思ふ）〔4行目〕

③ 十三〔6行目〕・九月三日〔7行目〕

④ こと〔2行目〕・もの〔2行目〕・まま〔4～5行目・二箇所〕・かぎり〔6行目〕・ほど〔6行目〕

問2 (エ)

問3 世の中にある物語というものを、何とかして読みたい、ということ。〔解答例〕

問4 (c) (奥の方に生ひ出でたる) 人 [1行目] (e) 姉、継母などやうの人々 [3行目]

問5 ますます物語を見たい（読みたい）という気持ちが高まつたけれども、〔解答例〕

問5 ますます物語を見たい（読みたい）という気持ちが高まつたけれども、〔解答例〕

問6 京の都 〔解答例〕

解説

問1 名詞の種類に関する設問。「名詞」は十ある単語の種類＝《品詞》の一つで、「自立語で、活用がなく、主語になる」とができる語」をいう。設問の「固有名詞」「代名詞」「数詞」「形式名詞」などは、《名詞》をさらに細分した呼び方であり《品詞》ではない。

①の「固有名詞」は《普通名詞》に対する呼び方で、たとえば人名・地名・組織名などのような、そのもの一つだけを指す名詞のこと。英語での固有名詞は、最初の字を大文字にして区別していることも参考になる。人名にあたる「光源氏」と、地名である「あづま路」「京」「いまたち」は問題ないだろう。迷うのは「薬師仏」だが、(注)にあるようにもともとが人物名なのでこれも固有名詞である。

②の「代名詞」には現代語の「こ・そ・あ・ど」に準じた《指示代名詞》と「あ・な・か・た」などの《人称代名詞》がある。だいたい現代語と同じであるが、違う点もあるので注意したい。特に「この」「わが」「かの」などは、現代語では「連体詞」と見るのでに対し、古文では、「こ」「わ」「か」などに「連体」以外の用法もあるために、独立した名詞（代名詞）として扱う点である。③の「数詞」は「一つ」「三日」「千歳（ちとせ）」などのような、数量や順序を表す名詞をいう。数字関係の語に注目すればよいのだが、日付も数詞に含まれる点に注意しよう。

④の「形式名詞」は、名詞本来の実質的な意味が薄くなり、たとえば「雪降る→とき」「あやしき→もの」のように常に《連体修飾語》に続いてだけ用いられる形式化した名詞を指し、「こと」「もの」「とき」「ところ」「ほど」「やう」「よし」「ゆゑ」「をり」などの語がある。ただし、これらの語でも、たとえば「とき来たる（＝よい機会が来た）」「ことを起す（＝事件を起す）」のよう用了いた場合は、同じ語でも実質的意味を持つという点で通常の名詞（＝《実質名詞》）の用法だということになる。

解答は連体修飾語の下に用いられている、実質的意味の薄い名詞を探せばよいが、3行目にある二箇所の「やう」は判断に迷うところ。形式名詞としての「やう」は、通常「思ふやう」「言ふやう」などと用い、「思うことには」「言うことには」の意味で用

いるのが典型的な用法である。しかし、「継母などやうの人々」の「やう」は連体修飾語を受けておらず、「など」という《助詞》に「……のよう」の意味を添えている点で、単語以下の《接尾語》だと考えられる。また直下の「光源氏のあるやう」の「やう」も、通釈に表れたように「様子、有り様」という実質的意味を持つ点で、これも通常の名詞の用法だと判断される。

問2 傍線部解釈の設問。特に助動詞や古今異義語などに注目して選択肢を吟味する。知識だけに頼らず、前後の文脈や主語なども見ながら考えたい。この場合「あやしかり／けむ」とわずか二単語であるので、「あやし」「けむ」双方の文脈上の解釈が問題となる。《過去推量》の助動詞「けむ（＝タダロウ）」の解釈はどの選択肢も悪くない。「あやし」は「理解し難い違和感」を感じること全般に用いる多義語で、「賤し・怪し」などの漢字をあてる。この場合傍線部だけでは判断がつかないので、主語を確認しておこう。直前の「あづま路の道のはてよりも、なほ奥つ方（＝都から遠いことを強調した表現）」出身の人（＝筆者）が主語であるから、語義的には悪くない（イ・ウ・エ）のうち、「田舎っぽい」とする（エ）が最もふさわしいと判断できる。文脈として、片田舎出身の少女がそれとは対照的に華やかな王宮の物語にあこがれたら、接続助詞「を」で逆接につながれていることにも注目したい。

問3 説明問題。結果的には解釈問題とほぼ同じだが、設問の求めに合わせて末尾を「……ということ。」に準じるまとめ方にする必要がある。「思」った内容は、その直後に「世の中に物語といふものあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ」と明言されているので、その部分の直訳をもとに、設問に合う形で解答をまとめればよい。助動詞部分「あんなる」、慣用的な表現「いかで……ばや」が解釈の要点となる。助動詞「なり」には終止形接続で《伝聞・推定》の「なり」と、連体形接続で《断定》の「なり」がある。この場合は「あり」が《ラ変活用》であるために形の上からは区別ができない。意味から判断できるが、知識として「あんなり（あなり）」などのような《撥音便（はつおんびん）》の後の「なり」はすべて「……ソウダ、……ヨウダ」と解釈すべき《伝聞・推定》の「なり」だということを覚えておきたい。あとは内容から《伝聞》の用法と判断して「アルソウダ」のように訳す。「いかで」は「ドウシテ」という意味の《疑問・反語》の副詞なのだが、後に「ばや」「む」「じ」「もがな」のような《願望》の言葉がある場合には「ナントカシテ」という《願望》を強調する副詞として解釈しなくてはならない。「世の中」「物語」などはこの場合そのままよいが、「見る」という動詞は、物語は単に「見たい」だけではないであろうから、「読む」というふうに解釈しておく方がよいだろう。なお、古文では現代文とは異なり「思ふに……と思ひて」「語るやう……と語る」「言ふやう……と言へば」

などのような表現の重複がよくあることも知つておきたい。

問4 主語抜き出しの問題。登場人物を、同一人物が別の呼称で呼ばれる場合に注意しながら、全て列挙してしまようとよい。その上で、敬語の使われ方や、人物の身分・年齢・性別などに留意して、主語が明らかなところから順に主語を確定していく。特に主語を明示してある箇所を見逃さないようにすることが大切である。本文のこの場面で「実際に登場している人物」は、①作者、②姉や繼母などの人々、だけであり、それ以外に「話題だけの登場人物」として③光源氏、④薬師仏、が挙げられる。述語に注目しながら前後の文脈を整理すると、「姉、継母などやうの人々の（＝主語を明示してある）……語るを^(c)聞くに、……わが（＝主語を明示してある）思ふままに……^(e)語らむ」という文脈になる。そこで(c)「聞く」の主語は①、(e)「語らむ」の主語は②と判るので、本文中の語句を過不足なく抜き出す。①は長くなるが「あづま路の道のはてよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人」、②は「姉、継母などやうの人々」が正解。「語句」という聞き方が答え方の重要なヒントでもある。文字数の制限はないのだから、変に節約して中途半端なところで切らないようにしたい。なお、(c)「聞く」(e)「語らむ」とともに、《敬語》は用いていない点に注目しておきたい。かりに③や④のような高貴な人物が主語である場合は、述部に《敬語》を使うのが原則だからである。

問5 条件付きの現代語訳問題。まず重要語句に留意しながら直訳し、それをもとにして設問の条件にきちんと答えるように整える。

「いとど」は「マスマス、イッソウ」の意であり「いと（＝トテモ）」とは明確に訳し分けなくてはならない語。「ゆかし」は「見タイ、知リタイ、聞キタイ」という好奇心に満ちた欲求を表す重要語で、それに接尾語「さ」がついて名詞化されている。「まされ／ど」は「《已然形》+ど」だから「……ケレド」と、明確に《逆接・確定》らしく訳出しなくてはならない。以上から直訳を作ると「ますます読みたい」という気持ちがつのるけれど」となる。前後の文脈にも目を配る。「その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど」を「どころどころ語る聞く」と、→「いとどゆかしさまさ」るというのだから、「ゆかし」と思った内容は「ところどころ」しか聞けなかつた「あれやこれやの物語を」にあるということになろう。この場合は問3とは異なり現代語訳問題なので、「あれやこれやの物語を」にあたる内容を直訳に補つて答えばよい。

問6 説明問題。傍線部の前に「京に とく 上げ たまひて…と…祈り申す」うちに「上（のぼ）らむ」ということになつたのだが

ら「京」が目的地。古文では「宮中」「高貴な人のもと」「都」など、尊いとされる場所に向かうことを物理的な上下とは関係なく「のぼる」とい、その反対を「くだる（地方から）」「さがる（高貴な人のもとから）」などという。現代でも東京に向かう列車は「上り」と呼ばれ、その逆は「下り」と呼ばれている。問4とは異なり「本文中の語句で」という指示はないので、単に抜き出しが済ますよりも「京の都」のように簡潔に答える方がよいだろう。

●
メ
モ
●

【問題】（演習）

出典：『宇治拾遺物語』 卷六の四 「清水寺に二千度参詣の者、双六に打ち入るるの事」 の全文 ／ オリジナル問題

現代語訳

今（ではもう）昔のこと、人のもとに奉公している（官位の低い）若侍がいた。何も願うことがないのに、人まねをして清水寺への千日参りを二度もした。その後さほどたたないうちに、（同じ）主人のもとに仕えていた同じような侍と双六を打ったが、ひどく負け（相手に）渡さなければならぬ物がなかつたために、（相手が）ひどく責めるので、困つてしまい、「わたしは、なにも持つてゐる物がない。ただいまたくわえている物としては、清水寺に二千度参りをしたことだけである。それを渡そう。」と言つたところ、傍できく人は、「だますのだな」と、ばかげたことと思つて笑つたが、この勝つた侍は、「それは大いに結構だ。（清水寺に二千度参りしたこと）を）渡すならば、受け取ろう。」と言つて、「いや、このままでは受け取るまい。三日間精進して、この次第を（神仏に）申し上げて、おまえが渡すという証文を書いて渡すならば、（その時こそ）受け取ろう。」と言つたので、（この負けた侍は）「結構だ。」と約束を交わして、その日から精進をはじめて、三日目という日、（勝つた侍が）「では、さあ清水寺へ。」と言つたので、この負けた侍は、「こんな馬鹿者に出会つたことよ」と笑いたい気持ちになつて、喜んで連れ立つて（清水寺へ）詣でた。（負けた侍は、勝つた侍の）言うとおりに証文を書いて、仏の御前で師の僧を呼んで、事の次第を（神仏に）申し上げさせ、「二千度御参りしたことをこれこれの者に双六の賭物としてうち入れた」と書いて与えたので、（勝つた侍は）受け取りながら喜んで、（神仏を）伏し拝んで退出していった。
その後まもなく、この負けた侍は、思いがけないことで捕らえられて牢屋に入つてしまつた。（証文を）受け取つた侍は、思いがけない手蔓てづるのある妻をもらつて、たいそう富が（身に）ついて官職にもつき、豊かな暮らしをすることになつた。「目に見えぬものではあるが、（勝つた侍が）誠意を尽くして受け取つたので、仏も、あわれとお思いあそばしたのであろう。」と人々は言い合つたとか。

問1 ①|| (イ) ②|| (ア) ③|| (イ)

問2 (1) 「負けた侍が」「勝った侍に」(渡す。)
 (2) 「清水寺に二千度参りしたことを」「証文という形で」(渡す。)「いざれも解答例」

問3 清水寺に二千度参りをしたが、双六で負けて渡すものがないので、その功德を勝者に渡すこと。
 [解答例]

問4 ふしをがむ・まかり出づ

問5 A||サ行変格活用／連用形 B||ラ行変格活用／連体形

C||ラ行四段活用／未然形

問6 (ア)|| B (イ)|| A (ウ)|| B (エ)|| B

【問題】(自習)

出典：『徒然草』〈第八十五段〉／ オリジナル問題

現代語訳

人間の心というものは素直ではないから、偽ることがないとはいえない（偽つて賢者らしくしている者もいる）。しかし、稀には本当の正直な人間がどうしていいことがあるか（必ずいるだろう）。自分自身は素直でないけれども、他人が賢人で徳の高いのを見て（自分もそのようになりたいと）羨むのは、世間普通の人情である。（それなのに）極めて愚かな人は、たまに賢人を見ると、この人を憎む。（その際）「（この人は）大きな利益を得ようとして、小さい利益を受けず、（表面を）偽り飾つて名を挙げようとしているのだ」と悪口を言う。（しかしこれは、賢人の心持ちは）愚かな人自身の心と違っているために、（愚かな人は）このような悪口を言うのであって、（これによつて、次のことが）わかつてしまふ、（すなわち）こういう人は（『論語』で孔子が言つてゐるよう）生まれつきの最も愚かな者で、その性質は変わることはできない（上知「＝とびきりの賢人」になることはできない）し、（賢人を「大きな利益を得ようとして小さい利益を受けない」とそしつたが、自分は）偽つて小さい利益を捨てるといふことさえもできず、かりそめにも賢者を真似ることができないと（いうことが）。

（たとえ狂人ではなくても）狂人の真似をするのだといって大通りを走つたならば、その人はとりもなおさず狂人である。悪人の真似だといって人を殺したならば、その人は悪人である。一日に千里を走る馬のまねをするものは、やはりそうした駿馬の類であり、聖人の舜を真似る者は、舜と同類の人である。たとえ偽つてでも賢者を真似る者を賢者と言うべきである。

解答

問1 (1) = ないわけでもない (4) = 真似することはできない 「いざれも解答例」

問2 初め…この人は下愚 終わり…学ぶべからず

問3 至りて愚かなる人

問4 賢

問5 係助詞：か 結び：ん

問6 ①|| (イ)・(b) ②|| (オ)・(a) ③|| (オ)・(a) ④|| (ア)・(e) ⑤|| (ア)・(c)

解説

問1 (1) 「なきにしもあらず」には、「なき」と「あらず」のふたつの否定語が含まれていることから、二重否定の構文であることがわかる。「なき」は形容詞「なし」の連体形である。「しも」は強調を示す副助詞だから、これをとると、「連体形+にあらず」の形になる。これは断定の打ち消しである。逐語訳すると「ないのではない」になるが、口語では打ち消しも「ない」と言うのでもぎらわしい。これは、「偽りなき」という観念を打ち消しているのだから、「ないというわけではない」となる。さらに、強調のニュアンスを付け加えると、「ないとも言えない」に類する、模範解答のような表現になるだろう。この言い回しは現代でも使われている。

(4) まず「学ぶ」の意味であるが、本文で他に「学ぶ」を使っている箇所を探すと、次の段落で、「驥を学ぶは驥の類ひ、舜を学ぶは舜の徒なり」と言っている。ここから、本文中で使われている「学ぶ」の意味を考えてみる。この「驥を……、舜を……なり」の文は、「狂人の真似とて大路を走らば、則ち狂人なり。悪人の真似とて人殺さば、悪人なり」の直後に出てくる。この、「狂人……なり。悪人……なり。驥を……、舜を……なり」の部分は、「狂人」「悪人」 \leftrightarrow 「驥」「舜」という対比を使って、一つのことを二つの側面から述べようとしている。つまり、「狂人……なり。悪人……なり。」と「驥を……、舜を……なり」は、類似の考え方（概念）を言つていると考えられる。したがつて、語句の対応を追えば、「真似」||「学ぶ」となる。なお、単語の知識として「まなぶ」は、「まねぶ」(=「真似」+名詞を動詞化する接尾語「ぶ」)から発生したと知つておこう。

次に、「べからず」であるが、傍線部の主語は前の行の「この人」であり、その後の「下愚の性移るべからず、偽りて小利をも

辞すべからず、仮にも賢を学ぶべからず」は、全て「この人」のあり方を否定している言辞だから、「～することができない」と解釈できる。

問2 まず傍線部「知りぬ」であるが、この「ぬ」は、動詞「知る」の連用形に接続しているから、完了の助動詞の終止形である。しかし、ここで「。」で終わらず、「、」で下に続いていることは、「知る」の目的語が後置されていると考えられるのではないかだろうか。そのような推測のもとに傍線部の上を見る。すぐ上に「この嘲りをなすにて」とあるが、「この嘲りをなす」は「至りて愚かなる人」の状態を表しているから、「にて」が「(～という状態)であつて」の意味になり、「知る」の目的語とは考えにくい。また、さらに上の「おのれが心に違へるによりて」は、「この嘲りをなす」にかかり、その理由を述べていると考えられるからこれも違う。したがつて、はじめの推測どおり、「知る」内容が後置していると考えられる。解釈としては、「(こういうことを)わかつた、それは！」という感じになるだろう。

問3 指示語の問題なので、傍線部より前から「誰」にあたる言葉を探すと、「人」「正直の人」(1、2行目)、「至りて愚かなる人」「賢なる人」が考えられるが、傍線部を含む箇所で「この人は下愚の性移るべからず」となっているから、「この人」＝「下愚の性が移ることのできない人」になる。したがつて、「この人」＝「至りて愚かなる人」になる。

問4 空欄Aを含む一文「偽りても……いふべし」は、「狂人……なり。悪人……なり。驥を……、舜を……なり。」と同内容であると考えられる。そこで語句の対応を見てみると、「狂人の真似」＝「狂人」、「悪人の真似」＝「悪人」、「驥を学ぶ」＝「驥の類ひ」、「舜を学ぶ」＝「舜の徒」となっている。したがつて、「偽りても A を学ばん」＝「賢」となり、空欄には「賢」が入る。

問5 係り結びを要求する係助詞は「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」である。このうち本文に出てくるのは、1行目の「か」のみである。

問6

①接続助詞「て」に続くから連用形。「着る・見る・似る・煮る・干る・射る・居る」のグループは上一段動詞。

②推量の助動詞「ん（む）」に続くから未然形。「得」は、「え／え／う／うる／うれ／えよ」と活用するア行下二段動詞。

③打消の助動詞「ず」に続くから未然形。「ず」の直前が「受け」と母音が工音になつているから下二段活用。

④動詞「違ふ」は、自動詞として使われる場合と、他動詞として使われる場合では、活用が異なる。すなわち、

(1) 自動詞「くいちがう、そむく、変わる、行き違う」の意で使われる場合は四段活用

(2) 他動詞「違うようにさせる、間違える、方違へをする」の意で使われる場合は下二段活用

になる。したがつて、設問の「違へ」も、活用語尾の母音が工音であるが、四段動詞の已然形と、下二段動詞の未然形の、二とおりの可能性がある。

そこでどちらか判別するために、下に接続している語を見ると、「る」となつてている。動詞に「る」が接続している場合、次の二とおりの組み合わせが考えられる。

(1) 四段・ナ変・ラ変動詞の未然形+受身・尊敬・自発・可能の助動詞「る」

(2) 四段動詞の已然形、もしくはサ変動詞の未然形+完了の助動詞「り」の連体形「る」

の場合である。「る」を受身・尊敬・自発・可能の助動詞と、完了の助動詞のどちらにとつても、上接の「違へ」は、四段動詞以外にはないことがわかる。設問の「違へ」が四段動詞ならば已然形であり、「る」は完了の助動詞となる。

⑤動詞が推量の助動詞「べし」に続いている場合、ラ変動詞以外は終止形になる。「いふ」は四段動詞なので終止形。